

かわら版 スポーツ連盟愛知通信

# みんなのスポーツ あいち

新日本スポーツ連盟・愛知県連盟

Tel(FAX) 052 (201) 4801

〒430-0011 名古屋市中区大須 1-23-13

1965▷2016



新日本スポーツ連盟

## スポーツは生きる力 いのちを支える —愛知ふれあい卓球大会—

- ・2017年8月5日・6日名古屋市天白スポーツセンターにて、第16回全国オープン身体障がい者 愛知ふれあい卓球大会が開かれた。全国25都道府県から、298人の選手と75人のボランティアの参加でいっぱい思い出を作った。
- ・健常者と障がい者が少しのルールの違いを認め、ほぼ対等に試合をするこの大会を参加者は楽しみにし、日常の練習に励んでいる。そこにはスポーツを共有することで、お互いを認め生きる力を確認している姿がある。
- ・今回の取材で、多くを教えられ学ぶことが出来た。障がいを持つ人にとって、スポーツは生きる力と同時に、いのちを支えていることが分かった。
- ・Tさん(75歳男性)は49歳で脳梗塞になり、左側半身が麻痺している。少年団の指導をしていたが、10年間、生活を始め意欲がなくなった。ある日卓球仲間が強引に誘ってくれた。仲間は上手に球を返球してくれて、卓球を好きにさせてくれた。今は中学生を指導している。彼らは成長が早いし可愛い。自分もいろんな大会に出て仲間が出来た。Tさんが言った「卓球に出会い、リハビリを兼ねた卓球が私のいのちを支えている。あきらめたら終わりだ。寝たきりで家族の介護を受けている人を周りで見ている。今自分の事はほぼ自分で出来、妻も喜んでいる」と。
- ・スポーツは楽しいし、健康に良いと考えていた自分は、まだとらえ方が狭かった。障がいを持っている人にとっては、いのちを支え、生きるためにスポーツがあると教えられた。

### 分け隔てなく生きていく —京都から家族4人で参加—

- ・4人とも健常者。子どもは小6と小2。
- ・参加したきっかけは何ですか?→「交流することでいろんな人とコミュニケーション出来る。練習も一緒にやっている。子どもたちに分け隔てなく生きて行って欲しい。」
- ・素晴らしい家族に出会うことが出来た。
- ・6年の男の子は、70代の方とゲームし、勝った。小さくガッツポーズした姿が印象に残った。
- ・自分のひ孫に近い子に「まいった。」と頭に手をやって笑顔を見せてくれた。

### 「スポーツは、相手の人に、 ありがとう」

- ・話を聞きながら、生きる力の源は何か、あきらめない心を支えるものは何か考えた。
- ・スポーツとの出会いが、「自分でもやれば出来る」ということを確かめさせてくれる。
- ・励ます友がいる。相手の人にまず感謝。

—ありがとう—



**お手伝いが出来れば  
—70歳代、保健師の方に聞く—**

- 卓球のボランティアとして始めて参加した。
  - 病院とは違い道具もないので、事故があったら大変と、緊張している。少しでもお手伝いが出来ればと思い、来た。
  - 人は平等である。だから試合でも障がい者とは思わない。
  - 当事者も差別されることは嫌だと思ふ。
  - みんな認めてあげないと…一緒に暮らしているの。
  - 一つのこと打ち込むことは、熱中できるので良いことだと思う。
  - 大会があるから、努力する。それがとても良い。
  - 健常者は、わがままも、あまえもある。
  - 「大変だな」「気のどく」→そういう目で見られるのが嫌。
  - 声掛けは良いが、余分な手出しは良くない。
  - 個人差もあるが「助けてもらえてありがたい」と思うこともある。
- \*大切なことをたくさん教えてもらった。最後に「九思一言」（きゅうしいちげん）の格言を聞いた。意味は→九つ思っ、一つに心を込めて言う。他人を傷つける事もあるので…  
(Kさん、また来年も会いましょう)

**視野が広がる、友だちが増える  
—34歳男性、知的障害の人に聞く—**

- 卓球は小4から始めた。高校3年間は部活がなかったので、サッカーをした。
  - 19歳からまた卓球を始めた。
  - 大会に参加することで、知り合いが増え、視野が広がった。
  - 国体に参加したことは、楽しい思い出になった。
- \*笑顔がとても素敵。  
「楽しいから続ける」  
→この原点を 教えられた。

**あきらめたら、それで終わり  
—取材で感じたあれこれ—**

- つい障がいに目が行きがちになる。それ以上に大切なことは、その人の生き方に対する考え方ではないのか。
- 卓球はリハビリ（機能回復）に良い。身体に掛ける負荷をコントロールできるから。
- プレーは、自分の使える部分を最大限に使い、全身でプレーしていた。
- 思い切りプレーしている人の姿は、美しい。
- 障がいの違いは人それぞれ。右手だけの人は、ラケットを左脇の下に抱え、球を上げてから持ち直し、サーブする。
- この大会が発展し、来年も取材できることを楽しみにしている。
- 最後にパラリンピックの生みの親でもあるグッドマン博士の言葉を引用したい。  
「失った機能を数えるな、残った機能を最大限に生かせ」

